

2021年 東京湾岸ミュージアム懇談会 第3回/第4回 報告  
アクションリサーチと問題分析の提案

瓦版第20号では、「東京湾岸ミュージアム懇談会」の第1回と第2回（5月11日と8月3日）の概要を紹介しました。今号では第3回と第4回の概要を紹介します。実施したのは2021年9月9日と11月17日です。

## 第3回：曖昧な方向性を反省する

第3回の東京湾岸ミュージアム懇談会では、第1回と第2回で参加者のみなさんから出された体験型活動のさまざまな課題をミュージアムの区別をせずに、計画(Plan)→実施(Do)→評価(Check)→改善(Action)のPDCA段階ごとにまとめて示しました。それが下の図1の「体験型活動における問題と課題」です。

ところが、この図を元に話をすすめようとしたところ、批判的な意見が続出し、時間内での議論を進めることが困難となりました。後で考えてわかったことですが、その原因は、参加者のみなさんにあらかじめ私たちの目指すべき方向性や具体的な議論の方法を示していなかったためでした。懇談会の後には毎回「振り返りシート」を提出してもらっていますが、第3回のシートは「話がどういう方向に向かっているのかわかりませんでした」とか「PDCAの図の利用目的が明確でなかった」などと惨憺たるものでした。ただ、「今日の話し合いはどうなっちゃうんだろう？ということも楽しんでいきます」とか「共通の問題意識があることに気づいた」という意見もあったことに救われました。

そこで第4回では、そもそも東京湾岸ミュージアム懇談会で何をを目指しているのかを明確にするために、前半では「アクションリサーチって何・・・？」という説明を川辺がおこない、後半に具体的な例を示しながら『問題分析』をやってみませんか」と提案しました。

第4回：みんなで勉強  
～アクションリサーチとは

「アクションリサーチ」とは、1940年代に社会心理学者クルト・レヴィン(Kurt Lewin)が提唱した、社会問題を解

決するための実践研究です。ある問題について研究するとき、通常スタイルでは、研究者と研究対象(たとえば、漁業者や地域住民など)とは明確に分かれていて、研究者は客観的な立場から研究対象にインタビュー調査やアンケート調査をおこない、調査結果を分析して、問題構造を明らかにしたり、政策提案をおこなったりします。ところがアクションリサーチでは、研究者も対象者も、社会状態についての目標を共有する人びとが研究の主体となって、自分たちの共同体が直面している問題を特定し、その構造をつまびらかにして、望ましい社会変化を起こすための解決策を探ります。

アクションリサーチの進め方は、参加者みんなで問題を特定、分析して、問題解決のために計画を練り、その計画を実施して結果を評価して、さらに改善をはかる、といった「プロジェクト・サイクル」の形で模式化されます(図2の左段の上の図)。アクションリサーチは、教育、医療・看護、企業経営、さらにはコミュニティ開発などのさまざまな分野で展開されています(図2の左段の中の図)。

こうしたアクションリサーチの理念と参加型手法は、地域の人びとが協同的に持続可能性を追求する「持続的発展教育」すなわちESDと親和性がよいことから(図2の

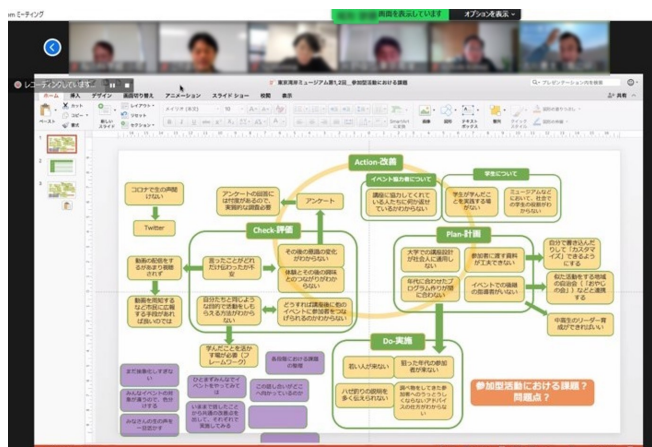


図1 第3回ミュージアム懇談会で提示した「体験型活動における問題と課題」のまとめ(図は尾形歌穂が作成)。

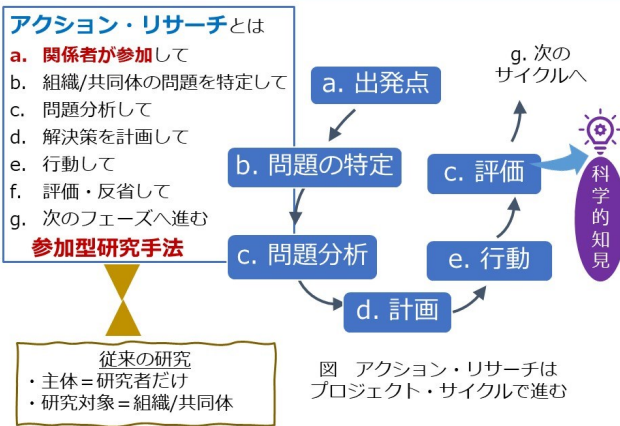
左段の下の図)、私たち江戸前ESD協議会でも、2010年に実施した「江戸前ESDしながわ塾」(瓦版13号)以降、アクションリサーチを意識して、出前講義や体験型学習、ワークショップなどの活動を実施してきました。

第4回前半の「アクションリサーチって何・・・?」と題した説明では、こういった内容を話しました。

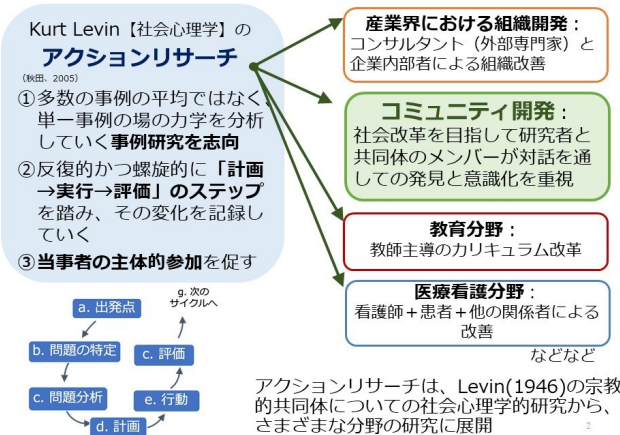
## ～「問題分析」の提案と 第4回の振り返り

そして次に『「問題分析」をやってみませんか』と題し

### 1. 「アクションリサーチ」って何・・・? 【参加型研究】



### 1. 「アクションリサーチ」って何・・・? さまざまな分野で



### 1. 「アクションリサーチ」って何・・・? 東京湾のESDで何をやる・・・?



図2 第4回ミュージアム懇談会でアクションリサーチを説明するために使用したパワーポイントから抜粋 (川辺みどり作成)。

て、少し行き詰った感のある東京湾岸ミュージアム懇談会をアクションリサーチの場と想定して、ミュージアムでの体験活動の課題を「プロジェクト・サイクル・マネジメント」手法を応用して分析してみませんか、と参加者のみなさんに提案しました。

プロジェクト・サイクル・マネジメント(通称PCM)手法とは、開発援助分野で用いられている方法です。プロジェクトの計画・実施・評価という一連のサイクルを、参加型でつくった計画表を用いて管理運営しながら進めます。はじめに、模造紙などを囲んでの参加型で「問題分析」をおこない、これにもとづいて「目的分析」をおこなうことで解決方法を考案し、計画を策定します。

本懇談会では、みなさんから同意を得て、今回の懇談会で、まず中心問題を定め(問題の特定)、「問題分析」として問題の構造を分析しながら系図を描き、次に中心問題の解決策をさぐるために「目的分析」をすることにしました。そのために、次回までにみなさんには、いろいろとあげていただいた問題のなかで、核となる問題＝「中心問題」は何かについて考えておくことをお願いしました(図2の右段の図)。

第4回懇談会の終了後に記入いただいた振り返りシートには、アクションリサーチについて「興味はありますが初耳の人間には理解するまでには至りませんでした」や「70年以上前に提唱されたアクションリサーチを使うとは・・・」といったネガティブな意見もありました。しかし「大変興味深く勉強になりました」とか「今後、本懇談会でより良い議論をするために、有益な知見を得ることができました」、「本懇談会内にとどまらず、他のプロジェクトでも活用できると感じました」といった好意的な意見も多かったです。とにかく、当初の曖昧な方向性や目的意識の不明確な東京湾岸ミュージアム懇談会は、少し軌道修正できたかなと感じた第4回の懇談会でした。

第5回の懇談会の内容については、次号の瓦版でお伝えします。

(川辺みどり/河野 博)

### 2. 次回「問題分析」をやってみませんか?

